

書 評

関戸明子著：『村落社会の空間構成と地域変容』
大明堂 2000年2月 A5判 400頁 5,000円
(本体)

本書は、日本村落の社会地理学・文化地理学の第一人者のひとりである関戸明子氏によって、これまでの氏の研究を総括した学位論文をもとに執筆されたものである。

まず序章では、日本における村落地理学研究の流れが簡潔に要約され、それを受けて本書全体の研究課題が提示される。第一部では、伝統的村落を対象として、おもに小地名を指標とした主観的空間と、土地利用などを指標とした客観的空間、さらにそれらの相互作用の解明が課題として設定される。対する第二部では、現代的村落を対象として、過疎化やその対応策である地域活性化などを指標とした社会変容と、土地利用変化や社会空間変化を指標とした空間変容、さらにそれら相互の規定関係の解明が課題とされる。個別の事例研究は、氏の関心を反映して、とくに山村ないし山間地域が選ばれている。

本書の具体的な構成は次のようになっている。

序章

第一部 村落の空間構成とその認識

- 第1章 地名研究の視点とその系譜—小地名の研究を中心に—
- 第2章 民俗資料からみた村落の土地利用と空間認識
- 第3章 尾張平野における村落構成と空間認識
- 第4章 吉野林業地域の村落結合と領域認識
- 第5章 山村社会の空間構成と地名からみた土地分類—奈良県西吉野村宗川流域を事例に—
- 第6章 焼畑山村における林野の社会的空間構成と主体的土地分類—愛媛県面河村大成を事例に—

第二部 山村の地域変容

- 第1章 近代日本における山村研究の視点と山村概念について
- 第2章 奈良県榛原町における村落社会の地域分化

- 第3章 群馬県六合村における過疎化とその地域的差異
- 第4章 福井県今庄町における過疎化と林野利用の変容過程
- 第5章 奈良県曾爾村における林野所有と林野利用の変容過程
- 第6章 群馬県川湯村における都市との交流事業による地域活性化

終章

第一部第1章では、本書のひとつの鍵となる小地名がこれまでどのように研究されてきたかが、地理学・民俗学・言語学の諸分野にわたり手際よく整理される。地名の語彙的な分類体系がパラダイム（範列）の型として提示された点は興味深い。社会地理学的・文化地理学的にみれば小地名は、語彙的分析だけでなく、その利用の具体相、住民間における認知の社会的属性差、時間的な変化過程、空間的分類体系などの分析が重要であるが、このような課題の多くは次章以降で実際に検討される。氏が課題とされた「実際の行動や生活とのつながり」は生態地理学的にも重要だが、第2点目の「社会構造とのかかわり」が具体的に何を指すべきかについては、今後さらなる検討が必要だろう。また、オバート・カテゴリー（明示化された範疇）である地名からだけでは主観的空間の解明には一定の限界があるという、カバート・カテゴリー（明示化されない範疇）の処理の問題は、現在もお文化地理学全体における重要課題だろう。

第2章では、本書の事例村落をダイジェスト的にピックアップし、小地名の語彙の空間的分布を検討しつつ、民俗資料としての地名の有効性が論じられる。本章の旧稿への批判はすでに『歴史地理学』172号で島津俊之氏によってなされているが¹⁾、評者も同様に土地台帳記載地名の「民俗資料」としての限界を感じる部分がある。確かに本章では、「土地台帳の政治性への考慮不足」という趣旨の島津氏の批判を考慮した加筆がなされている。しかしそれとは別に、評者自身の視点から見た別の問題点がある。それはやはり土地台帳の「形式性」である。現実の村落では、土地台帳と現地での認識の齟齬や現実の地名とは若干違う派生的地名の存在（ただし土地台帳は明治期作成のもので、それに対して現地の認識は基本的に現在の

ものであり、それを時間的変化として考慮する必要はある) がしばしばあり、さらに土地台帳には記載されない様々な空間スケールの地名が膨大に存在する²⁾。土地台帳だけからはわからない、このような多様な地名を解明することこそ、「民俗資料」を活用する意義であろう。また、島津氏による「接尾辞を検討しても常識の域を出る知見は出にくい」という趣旨の批判に対しては、評者はむしろその接尾辞を修飾する語の検討こそが重要である可能性を提言したい。住民は実際にどのような語彙をどのような接尾辞の語彙に付しているのか、そこに様々な地方間での共通性・類似性・差異性はないか、この視点によって著者の言う「可変的な部分」を明らかにすることもできるかもしれない。ただし、このような多様な民俗地名を、研究者がいかなる空間スケールのものとして地図化処理を行うかについては、慎重な手続きが必要であろう。

第3章は、尾張平野の5集落、愛知県甚目寺町小路・平和町平池・祖父江町神明津・一宮市萩原町富田方・蟹江町西之森を事例として、住民へのアンケートをもとに小地名や領域認知の社会的属性差を、著者が設定した村落類型別に検討したものである。本章の旧稿は、日本村落を対象とした認知論アプローチとしては地理学では比較的初期のものだが、例えば従来の社会地理学の村落領域認知論・近隣識別研究、文化人類学・民俗学の象徴空間論、さらに地名研究全体などにおける意義も主張できるだろう。しかしながら、その先駆的意義は認めつつも、いくつかの疑問もある。まず、アンケートの回答項目の一つとなった「境」とは、従来の社会地理学・民俗学・文化人類学などで論じられてきた「行政的村境」と「認知的(象徴的)村境」のどちらなのか。おそらく前者が念頭に置かれているのだろうが、そうすると、問われた住民はどちらを想定していたのか、住民の「認知」とはそもそも何か、ということが問題となる。さらに、予め回答項目として設定された「小字」とは、どのように抽出されたものなのだろうか。もし土地台帳が資料ならば先に指摘した限界があり、どこで折り合いをつけて立論するかが問題となる。このことは後の第5章にもいえる。また、氏の主張されるように、地名認知の個人差は確かにその村落の性格をはかる一つの指標となりうるが、それは村落共同体遺制の相対的残存度の高い村落での話であり、土地に経済基盤や信仰基盤をほとん

ど置かなくなった、「生活コミュニティ」の機能判定の指標とはなりにくいのではないかという疑問が若干残る。

第4章では、奈良県吉野郡の近世・近代期の社会空間の範疇、土地利用、地名認識がメソスケールとミクロスケールで検討される。ただ、アンケート回答項目の設定について、やはり「村の境」と聞かれて住民は実際に何を思い浮かべたのか、という疑問が少し残る。例えば部分的な境界の存在などは、この方法では処理しにくいのではないだろうか。また、いわゆる「客観的社会空間」と「村落領域」を、同じものとして扱ってよいだろうか。前者はあくまで社会的ネットワークの範疇を示すものであり、後者のように具体的な土地とは必ずしも結びつかない。このことは、先の「村境」をどう定義するかという問題とも関わる。

第5章では、奈良県西吉野村の2集落、平雄・勢井を事例として、小地名の使用頻度や語彙の空間的分布等を指標とした村落スケールの土地分類・空間分類が解明される。本章の旧稿は、以後の氏の研究の基礎となった重要論文であり、詳細なデータに基づいた家屋を中心とした空間区分の模式図や、領域把握の視点の移動性への言及、土地を識別する視点の複数性の指摘などは、今後も重要な知見となるだろう。

第6章は四国山地の焼畑山村、愛媛県面河村大成を事例に、土地利用や地名分類といった空間利用形態と、林野の所有構造という社会構造との関係が論じられる。具体的には、①焼畑での所有階層分化や所有地分散、②不在地主の増加による土地との関係の希薄化、③地名の知識と生業形態との結合、などが指摘される。第1点目に関しては、社会構造の検討という以上、村落内部の政治構造や人的ネットワークなどへの言及もほしい。また、第3点目に関していえば、地名知識の「共通性」に焦点を絞るならば、逆にそのような社会構造の詳細な検討は不要となろう。さらにこの「共通性」は、第3章での住民属性別の知識差の議論とどう繋がるのか、またこの状態を歴史的変遷の一段階とみるか、あるいは山村の特性の一つとみなすのか、といった点でも興味は尽きない。

続く第二部第1章では、近代以降の行政官・研究者が、「山村」・「山民」をいかに位置付けてきたかという「他者を位置付ける眼」の歴史的検討がなされる。このテーマは氏自身も終章で言及する「村落像」という「社会的表象」の問題と深く関わる。

例えば、中近世の山村像の形成を学際的に検討した、近年の歴史地理学の議論³⁾との接合も興味深い課題である。

次いで第2章では奈良県榛原町全域を事例に、高度成長期以降の村落社会の地域分化が検討される。Lewisの「勾配原理」を、より下位の空間スケールで見た場合の内部差の問題である。

第3章では群馬県六合村全域を事例に、集落別の人口構成・就業構成の通時的検討から過疎化の地域分化が論じられ、さらに高齢化の進む過疎地域の中核の公共施設として、六合温泉医療センターの受療行動とその変化が検討される。

さらに第4章では、福井県今庄町の2集落、杉谷・杣木俣を事例に、過疎化要因のミクロスケールでの差異が検討される。具体的には、入会林野の面積の大小と、村落社会の一体性の強弱が挙げられている。この結論と、隔絶性、中心集落との距離、地形条件、隣接集落からの波及効果、村落社会の一体性などを廃村過程のミクロ的規定要因とした、従来の廃村研究の知見⁴⁾との比較検討も詳細になされると、さらに興味深い。

続いて第5章では奈良県曽爾村の2集落、葛・太郎路を事例に、土地台帳・土地登記簿・森林組合資料・地籍図・空中写真などをもとにして、明治中期から現在までの林野所有・林野利用・村落社会の三者の通時的な関係が論じられる。村落内部の林野所有構造がその後の私有林の利用形態やさらには入会林野の利用形態をも規定すること、入会林野の利用形態が解体後の所有構造に影響することといった知見はたいへん興味深い。とりわけ林野所有と林野利用を通時的に表した章末の模式図は非常にわかりやすく、力作ぞろいの本書の図表の中でも最も評者の目が釘付けになった箇所である。また、一面のススキの海として著名な現在の曽爾高原の景観がいかんにして創出されたかという背景の記述も、一般の関心を引くだろう。

そして第6章では群馬県川湯村全域を事例に、過疎化村落の活性化対策（「村づくり」）としての観光レクリエーション施設の整備、野菜・果樹栽培への転換と促進、東京都世田谷区との交流事業の展開や、村内の一地区、中野地区を事例としたその後の生業構造変化が検討される。

最後に終章では、各部の議論の要約がなされる。第一部に関して提示された「認識空間」・「機能空間」・「社会空間」の三分法は、おそらく建築学や民俗学の村落空間論⁵⁾を意識したものであろうが、

この三分法と、本書の柱となる「社会」・「空間」という二分法とは、どのように理論的に整合するのだろうか。さらに、ここでの「社会空間」とは具体的には「所有権の空間構造」であろうが、このような定義は、社会地理学や文化人類学で使用される、「社会的ネットワークの範域」、「社会集団のテリトリー（なわばり）」、「社会集団の認知的領域」、「社会体系に基づいて構造化された空間体系」、「資本主義体制下の経済的・政治的過程の中で、物的・表象的・心的に、生産・実践される空間」といった諸定義⁶⁾とどう接点を持つのか、この点も「社会と空間の相互作用の解明」を目指す本書全体の今後の重要課題となろう。また第二部は、メソスケールを意識した分析が主体であるが、マクロスケールからミクロスケールまでも視野に入れながら主にメソスケールの山村地域の経済的・社会的再編を論じた、近年の経済地理学の「周辺地域」論⁷⁾との接合や、このような「地理学的アプローチ」による、他分野の過疎村落研究に対する独自性のさらなる追求も、これからの主要課題の一つとなるだろう。

本書は、まさに日本各地をまたにかけた氏のエネルギーギッシュなフィールドワークとそれに基づいた精密な図表が、圧倒的な迫力をもって語りかけるものであり、その意味でわれわれ後学の者を刺激してやまないが、それだけに惜しまれる点の一つだけある。それは、終章で著者自身が顧みるように、理論的枠組の提示が必ずしも十分でないために、本書全体における各章の個別の位置付けに若干不明確な部分が残ることになっている点である。とはいえ、関戸氏が本書で提起された「社会」と「空間」との相互作用、とりわけ「空間」から「社会」への影響、さらには社会と空間の弁証法的関係⁸⁾の具体的解明という困難な課題は、評者も含めた社会地理学・文化地理学全体の今後の大きな課題でもあり続けるだろう。その意味で、このような議論の礎を村落地理学において築いた本書の価値は大きい。

〔注〕

- 1) 島津俊之「もうひとつの〈地域変換法〉—関戸明子報告によせて—」、歴史地理学172, 1995, 17~20頁。
- 2) 今里悟之「村落空間の分類体系とその統合的検討—長野県下諏訪町萩倉を事例として—」、人文地理51, 1999, 433~456頁。

- 3) ①米家泰作「前近代日本の山村をめぐる三つの視角とその再検討」, 人文地理49, 1997, 546～566頁。②米家泰作「近世大和国吉野川上流域における『由緒』と自立的中世山村像の展開」, 地理学評論71A, 1998, 481～504頁。
- 4) ①坂口慶治「丹波高地東部における廃村化と耕地荒廃の過程」, 地理学評論47, 1974, 21～40頁。②坂口慶治「京都市近郊山地における廃村化の機構と要因」, 人文地理27, 1975, 579～610頁。
- 5) ①山崎寿一「集落空間のモデル化—四国山村・中久保集落の事例—」(日本建築学会編『図説集落—その空間と計画—』, 都市文化社, 1989) 68～74頁。②市川秀之「山間盆地村落の空間構成—貝塚市舊原の空間論的分析—」, 日本民俗学212, 1997, 1～31頁。
- 6) ①Buttimer,A., "Social Space in Interdisciplinary Perspective," *Geographical Review*, 59, 1969, pp.417-426. 加藤政洋訳「学際的パースペクティブからみた社会空間」(日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会＝空間研究の地平—人文地理学のネオ古典を読む—』, 大阪市立大学, 1996) 3～11頁。②島津俊之「村落空間の社会地理学的考察—大和高原北部・下狭川を例に—」, 人文地理41, 1989, 195～215頁。③原 真志「社会ネットワークと社会空間からみた住民の定着過程—堺市百舌鳥梅北町5丁を事例に—」, 地理学評論67A, 1994, 701～722頁。④浜谷正人「日本農村における社会空間の実証分析—いわゆる『村落領域』を事例として—」, 歴史地理学120, 1983, 1～14頁。⑤Evans-Pritchard,E.E., *The Nuer*, Clarendon Press, 1940, 271p. エドワード・エヴァン・エヴァンズ＝プリチャード著, 向井元子訳『ヌアー族—ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録—』, 平凡社, 1997, 177～241頁。⑥Lefebvre,H., *The Production of Space*, Blackwell, 1991, 454p. ⑦Harvey,D., *The Condition of Postmodernity*, Blackwell, 1990, pp199-323. デヴィッド・ハーヴェイ著, 吉原直樹監訳『ポストモダン性の条件』, 青木書店, 1999, 255～420頁。
- 7) 岡橋秀典『周辺地域の存立構造—現代山村の形成と展開—』, 大明堂, 1997, 401頁。
- 8) Soja,E., "The Socio-Spatial Dialectic," *Annals of the Association of American Geographers*, 70, 1980, pp.207-225. エドワード・ソジャ著, 水内俊雄訳「社会＝空間弁証法」(日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会＝空間研究の地平—人文地理学のネオ古典を読む—』, 大阪市立大学, 1996) 46～64頁。

(今里悟之)